

# 富山城

岡山市埋蔵文化財センター 田部巴菜



図1 遺跡位置図

## 遺跡の概要

富山城は北区矢坂東町に所在する山城です。周囲を平野に囲まれた、標高129.6mの矢坂山山頂に築かれました。山麓部では北西側で笹ヶ瀬川が南流し、北約2kmの地点を中世山陽道が、東側山塊の中央部を通して矢坂山をめぐるように西国街道が東西に通じます。富山城から西へ4kmほどの場所は備前と備中の国境であり、一帯は要衝地として重要視されました。

富山城が築かれた時期は定かではありませんが、伝承では平安時代に富山氏によって建てられたと伝わります。その後、少なくとも文明年間(1469～1487)には松田氏が治め、永禄11年(1568)(もしくは永禄12年)の宇喜多氏の入城と改築を経て、宇喜多氏に代わり岡山を治めた小早川氏によって慶長6(1601)、7年に廃城となりました。おもな使用時期は松田期と宇喜多期であり、室町時代から戦国時代にかけて山城としての機能を果たしました。

富山城一帯は万成石の産出地として知られ、周囲は明治以来の採石と戦後の住宅および工場用地造成のための採土によって大きく削られています。富山城も多くの遺構が影響を受けており、遺跡の把握と記録保存を目的として、1967年から1969年にかけて発掘調査が行われました。

調査の結果、富山城は松田氏と宇喜多氏の二度にわたる改築が行われ、近世城郭的要素もつ城郭であることがわかりました。出土遺物としては、備前焼、カワラケ、陶磁器、釘、武具、家具などの留

金具、漆膜、銃弾、宋銭などが出土しました。茶器や家具の留金具の出土から、富山城では日常生活も営まれていたことがわかります。

調査を通じて、富山城の概要は次のようにまとめることができます。

①尾根上に南北に連なる10の曲輪と4つの櫓台からなる中世山城。南北の曲輪と、東側の帯曲輪、西側の帯曲輪および櫓台によって本丸の守りをかためる。

②櫓台の個別設置や、二の丸、大手曲輪など比較的大きな平面をもつ曲輪に対して帯曲輪などが従属的に配置された縄張りなど、周囲の山城では見られない構造をもつ。

③松田氏の使用期間中に大規模な改築が行われており、この時期を境に松田前期と松田後期に大別できる。城主が宇喜多氏に変わった後にも改築されており、松田前・後期、宇喜多期の3段階の変遷を追うことができる。

④馬出や枳形を備えた大手の構造、日常生活や政治活動を可能にする永久建築の採用、対人用防御として十分な規模をもつと判断できる石垣など、岡山城に先行して近世城郭の要素・形態を備えた城郭である。

【交通】JR吉備線「大安寺」下車 徒歩20分

【参考文献】

岡山市教育委員会 1968『富山城跡第1次調査報告』岡山市教育委員会

岡山市教育委員会(出宮徳尚他) 1969『富山城跡第2次調査報告』岡山市教育委員会

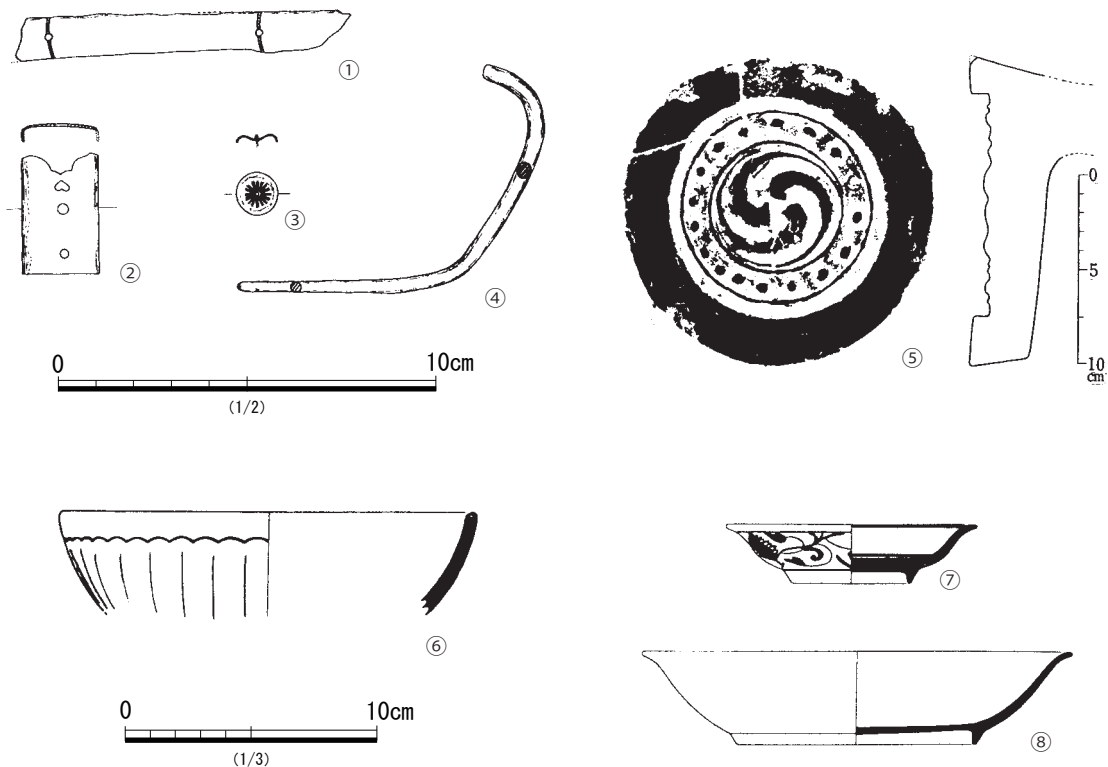


図2 松田後期の遺物(①~④:留金具、⑤軒丸瓦、⑥青磁、⑦染付、⑧白磁)

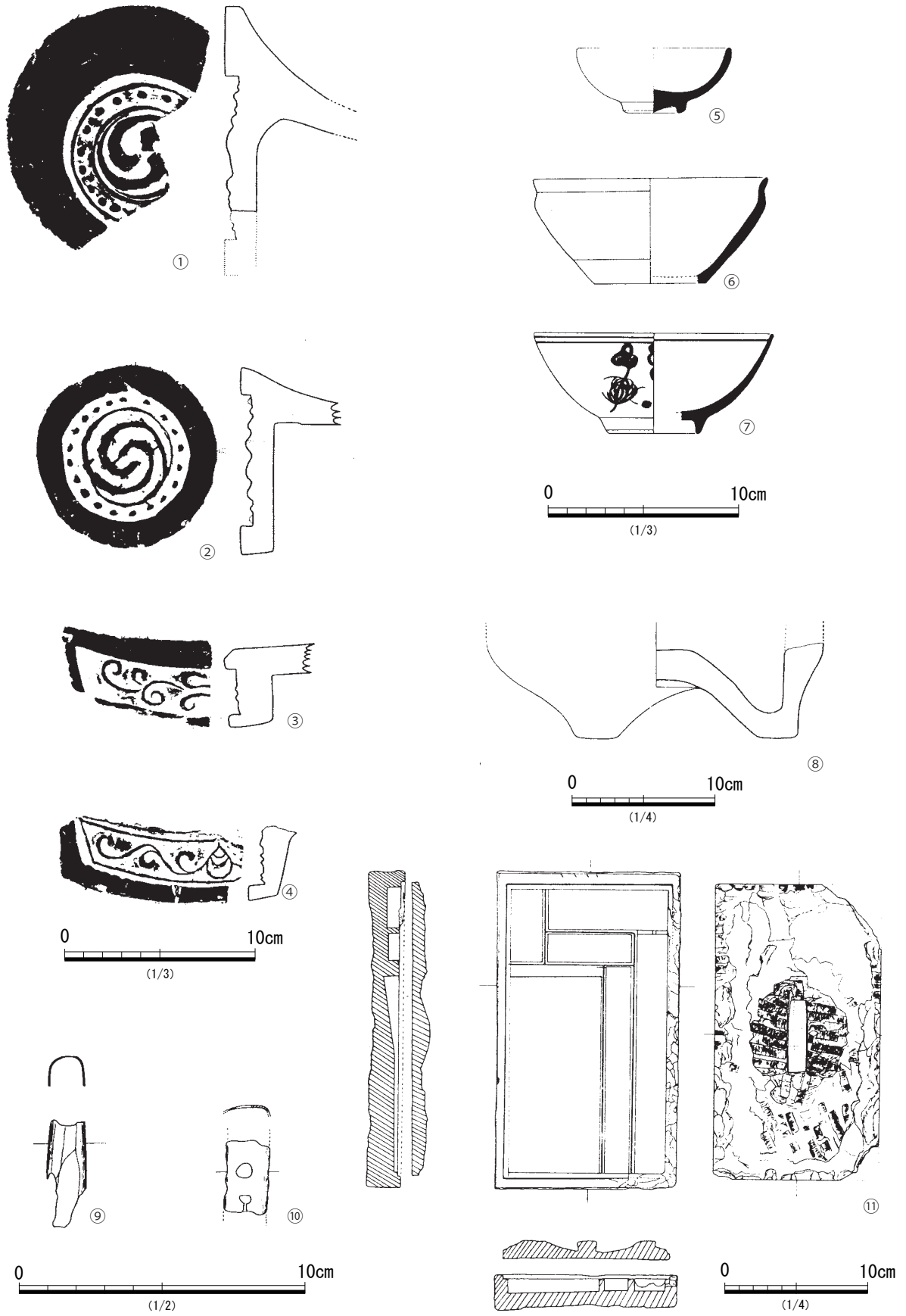
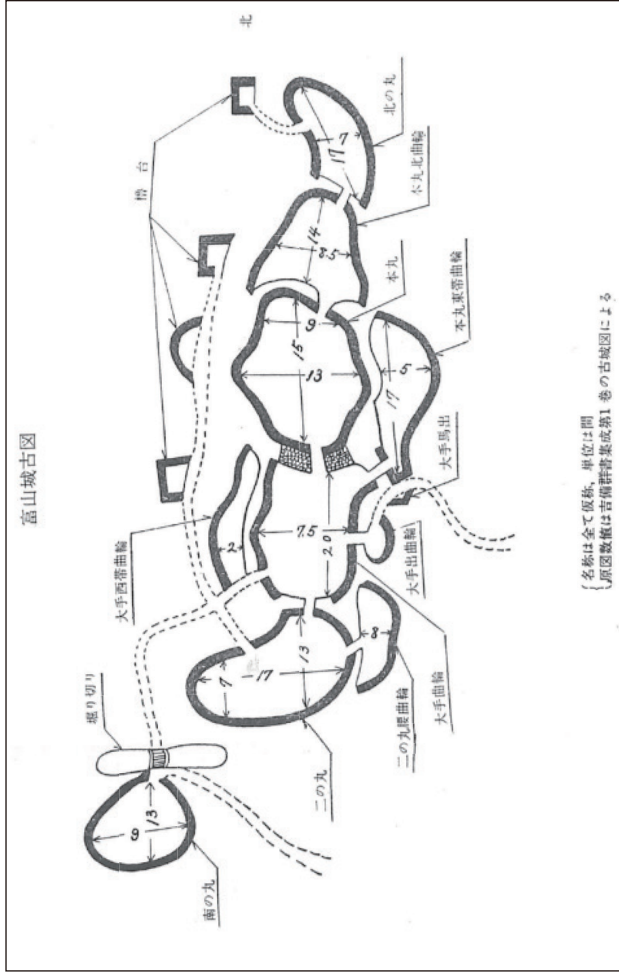


図3 宇喜多時代の遺物

(①～④): 軒瓦、⑤: 白磁、⑥天目茶碗、⑦: 染付、⑧風炉状土製品、⑨～⑩: 家具留金具、⑪: 硯)

富山城古図



〔名称は全て仮称、単位は間  
〔原図数値は吉備群書第1巻の古城図による〕

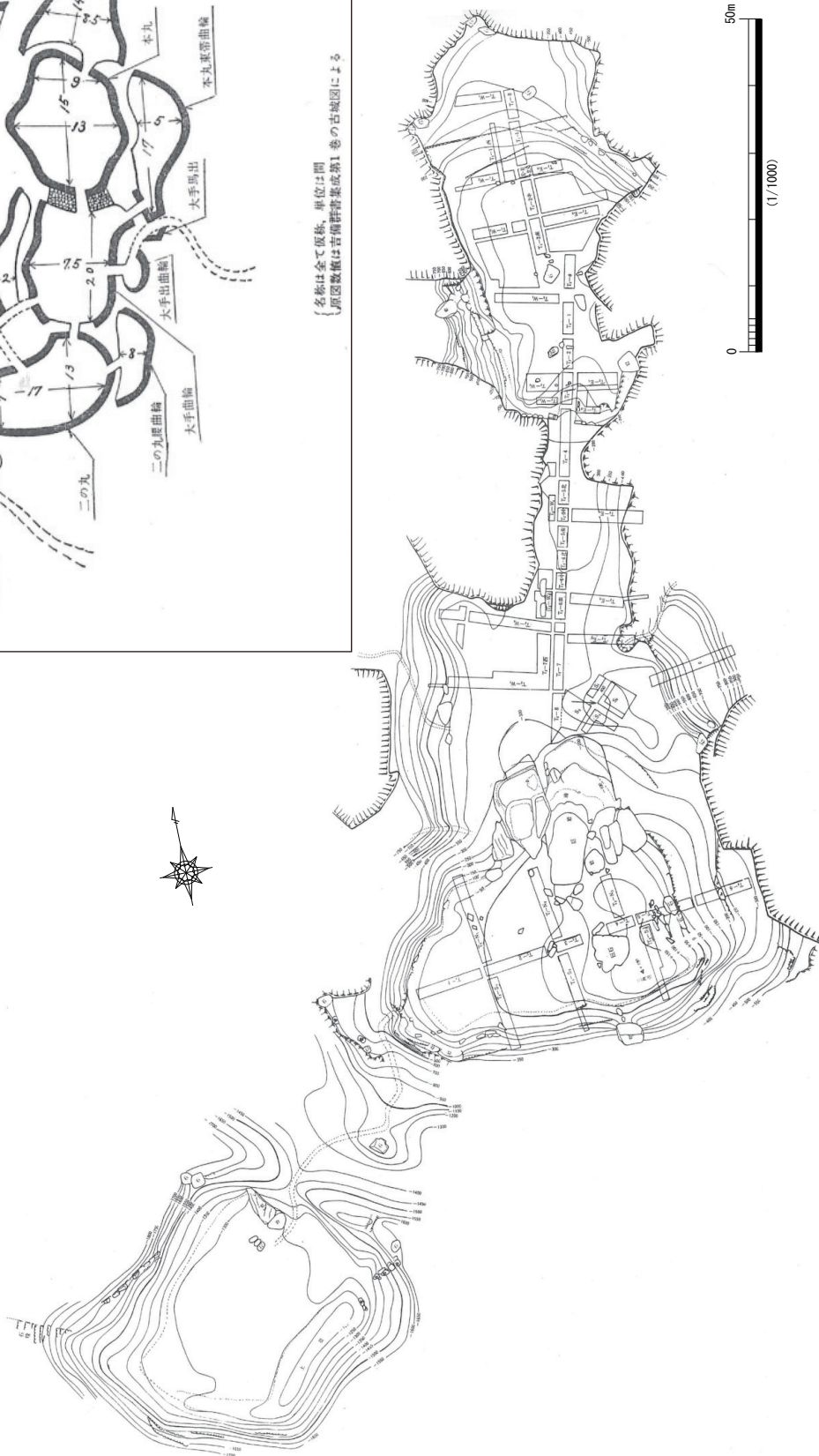


図4 富山城縄張り図